

# 運動疫学 ニュースレター



平成 29 年 6 月 8 日発行 No. 8

## 第 18 回運動疫学セミナーのお知らせ

第 18 回運動疫学セミナーを下記の日程で開催いたします。運動疫学に精通した講師陣の講義を受ける絶好のチャンスです。セミナーに一度も参加したことがない方、あるいは再度理解を深めたい方の参加をお待ちしております。多くの皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

日 程: 2017 年 8 月 26 日 (土) 13:00 ~ 28 日 (月) 16:00 (2 泊 3 日)

会 場: 帝京大学箱根セミナーハウス  
([http://www.teikyo.jp/hakone\\_seminar/](http://www.teikyo.jp/hakone_seminar/))  
〒250-0408 神奈川県足柄下郡箱根町強羅 1300-30 (本館)  
(箱根登山電車 強羅駅より一番坂登る: 徒歩 5 分)

時間割: 調整中 (昨年に類似したものです: 近日公開)

参加申込: 日本運動疫学会のホームページからの予定 (近日公開)

受講料: 一般 (有職者) 40,000 円  
学生 35,000 円

定 員: 全コース合わせて約 30 名 (定員になり次第、締め切ります。)

※セミナー受講者は日本運動疫学会の会員とします

※非会員の方は必ず入会手続き (当該

年度会費の納入+入会申込書)の完了をお願いします。学生会員入会ご希望の方は学生証の提示とご紹介者 (正会員) の明記が必要です (入会案内 → <http://jaee.umin.jp/join.html> 入会申込・お問合せ → [jaee.info@gmail.com](mailto:jaee.info@gmail.com))。

※セミナー受講料について: 学生会員であっても専任有職者には学生料金が適応されません。

※受講料には宿泊費と食費 (1 日目夕食 ~ 3 日目昼食) が含まれます。

※宿泊は帝京大学箱根セミナーハウス (相部屋) となります。個人での宿泊予約の必要はありません。

1. コース選択: 以下の 3 コースから 1 つお選びいただけます。

○ベーシックコース: 疫学的研究デザインを意識して研究計画をつくれるようになる。(※初めて参加される方は原則ベーシックコース)

○アドバンスコース: 疫学的研究の運営・解析・論文化する力を身につける。

○フリーコース: 疫学的研究を実施する上で身につけた企画・運営・解析・論文化の力を復習する。講義は自由に選択可能。グループワークはアドバンスコースに参加して

いただきます。(※原則アドバンスコースまでを終了した方)

2. 運動疫学研究に関する合同および個別相談プログラム

(1) 合同相談プログラム (運動疫学研究実習)

アドバンスコース 2 日目の「運動疫学研究実習」で、これから実施する、あるいは現在進行中の研究の現状について発表した後、講師陣全員に対して研究に関する相談や質問が可能です。このプログラムでの発表希望者は、研究の指導を担当されている方 (指導教授や研究班長) がいる場合、本セミナーにおいてこのような企画があることを伝え、必ず承諾を得てください。

(2) 個別相談プログラム

フリーコース参加者の中で、これから実施する、あるいは現在進行中の研究に関して講師陣と個別に話し合う時間帯を設けます。このプログラムへの希望者で、研究の指導を担当されている方 (指導教授や研究班長) がいる場合、プログラム参加への承諾を必ず得てください。



### CONTENTS

1. 第 18 回運動疫学セミナーのお知らせ … 1
2. 第 20 回日本運動疫学会学術総会のご案内 … 2
3. 第 3 回 運動疫学の集いのご案内 … 3
4. 第 52 回日本理学療法学術大会参加報告 … 3
5. 最近の注目論文 ……………… 4

## 第20回日本運動疫学会学術総会のご案内

第20回学術総会 学会長／関西福祉科学大学 野村 卓生



6月17日(土)  
～18日(日)  
に神戸大学楠  
キャンパスを会  
場に第20回日  
本運動疫学会学

術総会を開催させて頂くことになりました。会場の手配は神戸大学の小野玲先生、学術総会事務には大阪労災病院の浅田史成先生にご尽力頂いております。この場を借りて感謝申し上げます。第20回記念となる本総会のテーマは、「Physical Activity and Life Stage～行動変容を促すために何をどこまでできるか～」として、生涯を通じた身体活動・運動を促進するための戦略や課題について、議論を深めたいと考えております。学術総会の概要は以下の通りです。

### <第20回学術総会概要>

日 時：2017年6月17日(土)・18日(日)  
会 場：神戸大学医学部会館シスメックスホール、神戸大学医学部神緑会館(兵庫県神戸市中央区楠町7-5-1)

### 【第20回学術総会特別プログラム】

テーマ：運動疫学の成果の発信  
座 長：井上 茂(東京医科大学公衆衛生学分野、日本運動疫学会理事長)  
野村卓生(関西福祉科学大学保健医療学部、第20回学術総会学会長)

演 者：江崎禎英(経済産業省商務情報政策局ヘルスケア産業課)  
中山健夫(京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻健康情報学分野)  
澤田 亨(国立研究開発法人医薬基盤・健康・栄養研究所身体活動研究部身体活動評価研究室)

### 【学会長講演】

司 会：井上 茂(東京医科大学公衆衛生学分野)

学会長：野村卓生(関西福祉科学大学保健医療学部)

### 【シンポジウム①】

テーマ：ヒトの『健康行動』を変えるための企業の取り組み

座 長：重松良祐(三重大学教育学部) 門間陽樹(東北大学大学院医学工学研究科)

演 者：加藤清也(国際航業株式会社事業開発本部)  
米内雄樹(株式会社タニタWEBサービス企画部)  
齋藤 光(株式会社カーブスジャパン戦略企画部)

### 【シンポジウム②】

テーマ：生涯を通じて身体活動・運動を促進するためには何が必要か  
各世代における身体活動・運動促進戦略の特徴と今後の課題

座 長：内藤義彦(武庫川女子大学生活環境学部)

演 者：田中千晶(桜美林大学総合科学系)  
松尾知明(独立行政法人労働者健康安全機構労働安全衛生総合研究所産業疫学研究グループ)  
大藏倫博(筑波大学体育系高細精医療イノベーション研究コア)

### 【ミニレクチャー】

テーマ：研究コンセプトのブラッシュアップ

座 長：小野 玲(神戸大学大学院保健学研究科)

演 者：山本精一郎(国立がん研究センター 社会と健康研究センター 保健社会学研究部)

### 【指定講演①】

テーマ：認知機能と身体活動～MCIから認知症まで～

座 長：原田和弘(神戸大学大学院人間発達環境学研究科)

演 者：土井剛彦(国立長寿医療研究センター 老年学・社会科学研究センター 予防老年学研究部 健康増進研究室)  
杉本大貴(国立長寿医療研究センターもの忘れセンター)

### 【指定講演②】

テーマ：がんと身体活動～予防、治療からサバイバーまで～

座 長：小野 玲(神戸大学大学院保健学研究科)

演 者：井上順一郎(神戸大学医学部附属病院リハビリテーション部)  
牧浦大祐(神戸大学医学部附属病院リハビリテーション部)

### 【プロジェクト研究報告】

概 要：現行のプロジェクト研究の報告および新規採択研究発表

座 長：小熊祐子(慶應義塾大学スポーツ医学研究センター、日本運動疫学会プロジェクト研究委員会委員長)

### 【日本運動疫学会公式声明】

司 会：丸藤祐子(医薬基盤・健康・栄養研究所健康増進研究部)  
発表者：武田典子(工学院大学教育推進機構)

### 【一般演題 口頭発表】

座 長：岡 浩一郎(早稲田大学スポーツ科学学術院)  
石井好二郎(同志社大学スポーツ健康科学部)

### 【一般演題 ポスター発表】

備 考：第2日目の昼時間帯に実施、軽食あり

### 【懇親会】

日 時：2017年6月17日(土)  
会 場：神戸大学生協医学部医学科食堂

### 【健康運動指導士および健康運動実践指導者の単位認定について】

健康運動指導士および健康運動実践指導者の登録更新に必要な履修単位として講義3単位が認められます。[認定番号 176072]

## 第3回 運動疫学の集いのご案内

山梨大学 安藤 大輔

今年度も日本体力医学会大会の前日に第3回目の「運動疫学の集い」を開催いたします。今回の集いのテーマは「日本の今を知る：身体活動・運動に関わる現状と課題—授業・現場で活かせる身体活動・運動の最新情報—」とし、シンポジウムを企画しております。本シンポジウムでは、各分野で精力的に研究を実施されている先生方にご講演いただく予定であります。多くの方々のご参加をお待ちしております。

### 1. テーマ :

日本の今を知る：身体活動・運動に関わる現状と課題—授業・現場で活かせる身体活動・運動の最新情報—

### 2. 日時 :

2017年9月15(金)15:00～17:00(予定)

3. 場所 : 松山大学 (予定)

4. 交通 :

伊予電鉄鉄砲町から徒歩5分

5. 参加費 :

1,000円 (予定:当日、受付にて徴収)

6. プログラム :

14:30 - 15:00 受付

15:00 - 17:00 シンポジウム

座長: 安藤大輔 (山梨大学)、松下宗洋 (獨協医科大学)

1: 子どもの身体活動・運動と体力レベルの状況と課題

演者: 鈴木宏哉 (順天堂大学)

2: 成人の身体活動・運動と体力レベルの状況と課題

演者: 丸藤祐子 (医薬基盤・健康・栄養研究所)

3: 高齢者の身体活動・運動と体力レベルの状況と課題

演者: 辻大士 (千葉大学)

4: 座位行動に関する我が国の状況と課題

演者: 菊池宏幸 (東京医科大学)

5: 身体活動・運動を支える政策・環境づくりの現状と課題

演者: 武田典子 (工学院大学)

18:00 - 20:00 懇親会

なお、集いの会場や参加費、懇親会の会場等の未定の部分に関しては確定次第、学会ホームページ (<http://jaee.umin.jp/index.html>) 上のご案内いたします。

## 第52回 日本理学療法学会大会参加報告

製鉄記念八幡病院 池永 千寿子

2017年5月12日～14日に開催された第52回日本理学療法学会大会に参加しました。今学会は、12の分科学会と10の部門の全てが参加する連合大会方式で開催され、6500名の参加者が専門性を深め合いました。過去、理学療法士は多岐にわたる診療分野への対応から、臨床力を身に着けることに追われ、日本人を対象に理学療法を展開した研究データを蓄積する余裕を持ってませんでした。近年、会員数の増加やガイドラインの作成とともに、臨床力を鍛えるだけでなく、科学的根拠に裏付けられた理学療法の水準の向上のための研究データの蓄積の重要性が強調され、その教育にも力を入れるようになりました。今大会のテーマには

『理学療法士の学術活動推進』が掲げられ、学術水準の向上に貢献できるような教育的企画や各分野の臨床の学術活動の具体的な方法の提示など、聴講だけでなく積極的な討議も展開される活気的な学会でした。

私は、「糖尿病に対する理学療法の発展を目指して～臨床介入研究最前線～やればできる!! 糖尿病の理学療法介入研究」というテーマのシンポジストとして『糖尿病患者の「座りすぎ」の現状と治療への影響』を発表しました。当院では、2010年より糖尿病患者に入院時、退院1か月、3か月、および6か月後に運動療法の教育的指導を実施し、国際標準化身体活動質問票を用いて1週間の身体活動量を算出

していました。退院後の身体活動量は向上するものの、座位時間に変化はありませんでした。座位時間がヘルスケアアウトカムにもたらす不利益は多くの研究で明らかにされています。しかし、日本人

糖尿病患者におけるその影響はまだ報告されていません。そこで、既データから①日本人糖尿病患者の座位時間の状況、②座位時間のHbA1cへの影響、および③座位時間の関連する因子の特定、を検証することで、座位時間を減少させる介入の必要性を検討しました。今研究で日本人糖尿病患者でも座位時間を減少する介入の必要性が示されたため、現在、教育的指導の中に座位時間についての言及を始めたことを発表しました。開始した教育的指導において、入院時と6ヵ月後の座位時間に有意差を認めていないこと発表しましたが、発表後、介入方法に対して、意見を頂く機会に恵まれました。結果が否定でも、私が発表することによって実現した意見交換の中から進化のきっかけを得られるのだと実感しました。

研究者としての未熟さをたくさん感じさせられましたが、最前線で研究に取り組む理学療法士と後方でデータを保障する理学療法士が混在し、お互いに協力しあう立場にあることを、聴講と発表を通して感じた有意義な学会参加となりました。



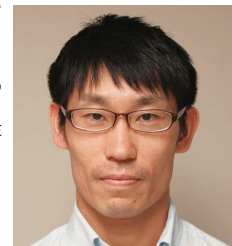
【最近の注目論文】

Jakicic JM, Davis KK, Rogers RJ, King WC, Marcus MD, Helsel D, Rickman AD, Wahed AS, Belle SH. Effect of wearable technology combined with a lifestyle intervention on long-term weight loss: the IDEA randomized clinical trial.

JAMA. 2016;316(11):1161-1171. doi: 10.1001/jama.2016.12858

ウェアラブル機器と生活習慣介入の組み合わせが長期の体重減少に及ぼす影響  
：ランダム化比較試験 (IDEA)

東京大学大学院 笹井 浩行



近年の技術革新に伴い、身体活動をモニターできる身体に装着可能（ウェアラブル）な機器や食事をモニターするインターフェースを備える機器など、生活習慣改善を支援する機器が多数市販されている。これらのウェアラブル機器の利用が肥満者に対する減量効果を高めるか否かを検証した長期間の研究は存在しない。そこで、この研究では若年成人を対象に、生活習慣介入にウェアラブル機器の利用を加えることにより、24ヵ月間の長期の体重減少に及ぼす影響を検証している。

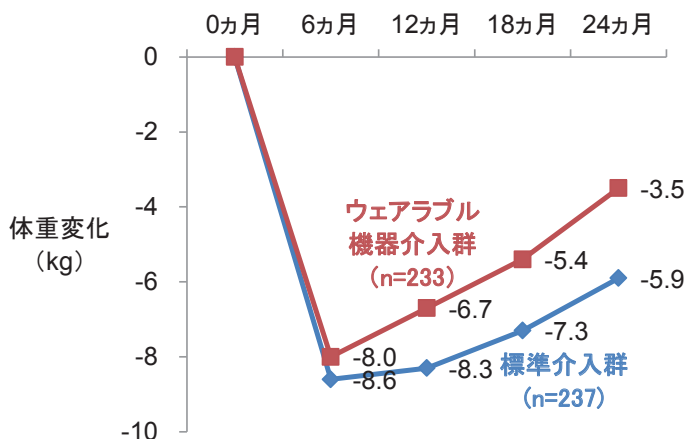
本研究のデザインは並行群間ランダム化比較試験である。対象者は地域住民から募集したBMIが25以上40未満で18～35歳の若年成人肥満者471人であった。対象者は標準介入群とウェアラブル機器介入群にランダムに割り付けられた。両群ともに、最初の6ヵ月間は週1回、7～24ヵ月は減量に関する各種トピックを扱う月1回の集団型セッションに参加した。7ヵ月目から

は10分程度の電話での個別指導を月1回、減量支援に関するテキストメッセージを週1～2回を受けた。初期体重に基づいて食事摂取量を1日1200～1800kcalに抑えるとともに、10分以上継続する中高強度身体活動を週300分間まで増やすよう指導した。標準介入群では、研究の専用ウェブサイトを通じて身体活動と食事摂取を自己報告し、ウェアラブル機器介入群は、上腕に装着する活動量計とその付属ウェブサイトを通じて身体活動と食事摂取を報告した。介入スタッフは電話による個別指導の際にこれらの情報を参照した。本研究の主要評価項目は24ヵ月間の体重変化であった。

参加者471人のうち350人（74.5%）が24ヵ月間の介入を完遂した。24ヵ月間の体重減少量はウェアラブル機器介入群で3.5kg（95%信頼区間：2.6～4.5）、標準介入群で5.9kg（5.0～6.8）であった（図）。予想に反して標準介入群に比べてウェアラブル機器介入群

で体重減少量が2.4kg少なかった。身体活動や食事摂取は両群ともに改善し、群間差は認められなかった。

ウェアラブル機器を利用して身体活動や食事をモニターすることにより、標準的な行動介入に対して追加効果は認められず、むしろ長期の減量成績が好ましくない結果となった。なぜ効果が減弱されてしまったのか原因を探る必要がある。今日では数え切れない種類のウェアラブル機器が市販されており、このような長期の研究で使われた機器は、結果が公開される頃にはすでに入手不可能という事態も予想される。別の機器で同様の結果が得られるのかは不明で、各機器で逐一検証することは事実上不可能であり、この領域の研究の難しいところである。



発行：日本運動疫学会  
編集：日本運動疫学会 広報委員会  
日本運動疫学会事務局  
〒160-8402 東京都新宿区新宿 6-1-1  
東京医科大学公衆衛生学分野  
E-mail: [jaee.info@gmail.com](mailto:jaee.info@gmail.com)